



児童文学作家 くすのきしげのりさんの講演

上小地域には、上田市と小県郡に勤務する教職員が集まる「小県上田教育会」という職能団体があります。過日、教育会の定期総会が開かれ、その中で講演会が行われました。

講師は、児童文学作家のくすのきしげのりさん。お名前を聞いてピンときた方も多いのではないのでしょうか。『おこだでませんように』を始め、各学年の国語の教科書にも作品が掲載されております。現在は、徳島県鳴門市を拠点に創作活動に取り組まれ、数多くの著作を発表されています。教員や行政の指導主事、図書副館長というご経歴もお持ちで、我々教員にとって非常に心に響く内容でした。

くすのきさんの作品に登場する子どもたちは、とても身近で、どの教室でも出会うことができる子どもたちです。特殊能力やスペクタクルな展開とは全く無縁の、誰もが生活の中で感じるふとした気持ちを題材に物語を作っておられるそうです。

例えば、「自分のいいところさがし」。授業でもよく取り組まれる活動です。絵本の中でも、授業でそういう場面がやってきました。主人公は、一生懸命自分のいいところを探そうとします。でも、いくら考えても出てきません。友達のいいところ、例えば足が速いAちゃん、絵が上手なBちゃん、力持ちのCちゃんなどなど、そう、友だちのいいところならいくらでも思いつくのに。涙を流す主人公に先生が一言語りかけます。「あなたのいいところは・・・」。

「ああ、こういう場面あるよなあ」と思い巡らせながら、絵本の内容とくすのきさんの思いに耳を傾けました。作家さんですので、心に響く言葉で表現されていますが、子どもの内面を捉え、その思いや育ちをエピソードとして語るということは我々教員にも求められる大事な資質です。そのまなざしの温かさを我々も学ばなければいけないと感じました。

さらにくすのきさんは、「大人は子どもにとっての大事な『環境』だ」とも話しておられました。どういう大人が子どもたちと接しているか。子どもの前に立つにふさわしい自分であるか。そんな風に問いかけられているように感じました。

子ども向けの絵本であっても大人が読んで感動する作品は数多くあります。くすのき作品もまさにその一つ。子どもとの向き合い方について深く考えさせられました。学校の図書館にも何冊かございます。お立ち寄りの際には、ぜひ手に取ってみてください。